

## 受賞者の業績



し した かす こ 氏 46歳(保健婦・青森県)

劣悪な衛生環境のなか、へき地母親学級、赤ちゃんコンクールの積極的な実施等で、乳児死亡率、低体重児の出生減少を実現。20年余の使命感あふれる保健活動の推進は、住民の健康意識の変革を促し、急務であった健康づくり推進協議会の組織化を可能にする。今日では教育委員会の協力を得て、中学生が乳幼児と触れ合う「ふれあい体験学習」を実施している。



さ さき すみ こ 氏 44歳(保健婦・秋田県)

昭和50年、六郷町に着任以来、妊娠中から乳幼児期までの一貫した母子保健サービスの充実を図るなど基盤整備に尽力。また、住民と協力して進める保健活動の重要性を感じ、母子保健推進員の育成をはじめ、健康づくり推進協議会・母子学校保健部会・養護教諭部会等の設立に力を注ぐなど、町における保健活動のリーダーとして広範囲にわたる活動を展開している。



わた なべ じゆん こ 氏 52歳(保健婦・茨城県)

昭和47年、石岡市に着任以来、生活困窮家庭の乳児への牛乳・ミルクの配布、農村地区出張育児相談等、地域に密着した保健活動を推進。妊婦健診、各乳幼児健診をまとめた独自の母子管理カードの利用で一元的な母子保健管理を実現し、ハイリスク妊婦や先天異常児の発見に貢献。現在、管内保健婦業務連絡会会長として保健婦の資質向上のため日々研鑽に励んでいる。



いし さか きみえ  
石坂喜美江氏 52歳(保健婦・群馬県)

28年間の保健婦生活のほとんどを農山村地域の母子保健活動に従事し、常に意欲的に新しい課題に取り組んで、多くの新しい分野を開発・普及した業績は高く評価されている。また昭和57年から5年間、新設の県立小児医療センターの母子保健指導室に勤務し、病院・市町村・保健所の連携による退院後の訪問指導の結果報告のシステムづくりにも尽力した。



さくま さなえ  
佐久間早苗氏 54歳(助産婦・千葉県)

昭和45年に開業以来、妊婦、母親が主体的に分娩や育児に取り組めるよう、実習中心の保健指導を通して健康教育に力を注ぐ。先輩の母親たちのビデオや産婦の体験ノートを活用した妊婦教室の開催、分娩予定者全員の家庭訪問指導は、妊婦はもとより地域住民からも厚い信頼を得ている。今日では近隣の町からの要請により母親学級の講師としても活躍中である。



きた さわ あきこ  
北沢あき子氏 53歳(保健婦・長野県)

乳幼児健診時の障害の早期発見・フォローアップ体制の確立を中心に母子保健活動を30年にわたり白馬村・波田町で展開。障害児をもつ親の会「手をつなぐ親の会」との連携による就学・就職指導、福祉作業所「ひかり教室」開設への助力は高い評価を得ている。また、思春期保健の講演会や成人病予防の親子健康教室の開催等、常に町民の健康を第一に考えた活動を行っている。



かわ せ よし かつ  
川瀬芳克氏 44歳(視能訓練士・愛知県)

視覚の発達時期を過ぎての弱視や斜視の発見では、効果的な治療成績が得られないことを憂慮し、昭和48年より3歳児健診、1歳6か月児健診での視覚健診システムの開発、定着に努め、早期治療による幼児の正常視力獲得を可能にした。氏が開発したアンケート様式は、健診会場での視覚検査の高率化に寄与し、厚生省、日本眼科医会のアンケートのモデルともなった。



池田米子氏 54歳(助産婦・三重県)

病院助産婦として、母親学級や安産教室、乳房外来を開設し、核家族のもとでの妊産婦の保健指導に尽力した。昭和56年からは、座位分娩、夫立ち会い分娩、受持制母子看護等の新しい試みを助産業務に取り入れ実践したほか、退院後も継続ケアが必要な患者に対しては、地域の訪問助産婦との連携により保健指導体制を確立する等、その意欲的な活動が目ざされている。



宮木貴志子氏 47歳(保健婦・京都府)

昭和42年より山城町役場に奉職。郡内に先駆けてすべての母子保健情報を管理できる管理票を作成し、障害児の早期発見、早期療育システムの確立に中心的役割を果たす一方、障害児の保育施設の開設を働きかけ、すべての保育所で障害児の受け入れを定着させた。また、安産教室・むし歯予防教室等数多くの教室を開催し、その意欲的活動は高く評価されている。



荒木和子氏 54歳(保健婦・兵庫県)

昭和36年から、関係機関の協力を得、先天性股関節脱臼健診に力を注ぐ。その成果が評価され、県下全保健所で同健診が実施されるきっかけとなった。また、3歳児健診に「心の相談」指導を取り入れるとともに、同健診を毎月実施したことで地域の母親同士の交流の場ができ、受診率が向上した。最近では管内市町保健婦の連携強化を図るための指導的役割を担っている。



稲田美都恵氏 46歳(保健婦・広島県)

昭和53年以来、保健所の指導を得ながら、因島市土生町を皮切りに各地域に母子愛育班を結成させた。これにより各地域の情報交換、保健指導等がきめ細かく行われるようになった。また、出生数減少と働く婦人の増加のため、父親の育児参加を呼びかけるとともに、自主的な地域活動組織育成を手がけた。地域の若手保健婦のまとめ役として今後の活動が期待される。



ふじさわ けいこ 氏 45歳(保健婦・徳島県)

昭和49年に石井町に奉職以来、妊娠中から乳幼児健診までの一貫システムを作成。一人ひとりに健診の呼びかけ、結果通知を行う等きめ細かな指導を実施して健診の充実に貢献。特に医師会・歯科医師会・徳島大学小児歯科の協力を得、1歳6か月児・3歳児の各健診の歯科健診にカリオスタットを導入、むし歯罹患率を改善する歯科予防対策の中心的役割を果たしている。



かきうち はるこ 氏 45歳(保健婦・佐賀県)

昭和46年、鳥栖市の保健婦に着任。以来21年間、一貫して母子保健推進員の育成と組織化に尽力。現在、佐賀県の市町村保健婦協議会副会長を務め、特に推進員未設置市町村への指導に力を注いでいる。また、こうしたリーダ的な活躍のみならず、地域に根ざした活動も広く行っている。特に母子健康相談には定評があり、多くの母親から絶大な信頼を得ている。



かみ た のぶこ 氏 43歳(助産婦・宮崎県)

5年間、保健所保健婦として山間へき地で母子相談と衛生教育に力を注ぎ、死産率の減少に貢献。昭和54年からは、都市市で開業助産婦として分娩業務に従事するかたわら、母子保健推進員として市の母子保健事業のハイフ役となって活躍したり、妊産婦・新生児の訪問指導・看護学校の講師・臨床指導などを積極的に行い、地域住民の人望も厚く、高く評価されている。



しき はら ますお 氏 43歳(助産婦・板橋区)

昭和47年以来、病院の産婦人科・看護婦養成所の教員などを経て、現在はフリーの助産婦として、板橋区を中心に母親学級の講師、分娩介助、出張乳房マッサージ、新生児訪問、マタニティスイミングの妊婦管理等、広範囲の母子保健事業に意欲的に取り組んでいる。最近では女性の成人病予防の教室で運動処方と実践の講師、女子大学生の健康管理にも力を注いでいる。